



《 2012年お花見会盛会に華やぐ 》

4月1日(日曜日)、奈良日仏協会の恒例行事「お花見会」が大和文華館にて開催されました。昨年は東日本大震災の被害を思い中止され2年ぶりの「お花見」のはずでしたが、長く厳しかった冬のため開花が例年よりずっと遅れ、残念ながら期待どおりの桜の花を楽しむことは叶いませんでした。



しかし、花をテーマにした美術品の鑑賞のあと講堂に移動し、坂本会長ご挨拶に続く浅野秀剛館長のご講演、次いで青山会員による日本舞踊と、まずは会の前半を美と知の面から楽しんでいただけたと思います。

ご講演は「海外浮世絵事情」と題し、近世以降に日本美術が欧米に紹介され、大量に輸出され、愛された歴史をお話いただきました。有田焼(特に柿右衛門様式、積出港の名から伊万里焼として知られる)は中国景德鎮からの磁器輸出が途絶えた17~18世紀に盛んだったこと、江戸時代末期から明治期にかけては推定で百万枚もの浮世絵が輸出され、その過半がパリ経由で流通したこと、浮世絵の当時の価格相場、日本美術を大量に所蔵している著名な美術館の情報など、多くのことを学びました。



講演のあとは、青山登美子さん(舞台名、藤間勘登美さん)による藤間流の日本舞踊。長唄「鶴亀」の曲にのせた華やかな踊りを楽しませていただきました。

会の後半は大和文華館の入口近くにある「文華ホール」に場所を移した懇親会。ここでは岡田由美子さんの歌と南木優子さんの電子ピアノによる音楽で、明るく楽しい雰囲気盛り上げていただきました。オープニングはプッチーニのオペラ「蝶々夫人」からアリア“ある晴れた日に”ほか。浅野館長にお願いした乾杯のご発声のあと、次々に披露される美しい歌声。中でも印象的だったのは、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」を歌詞にした歌曲、そしてこの詩のフランス語訳の朗読(仲井理事が担当)でした。これは今も苦しむ東北被災地へのエールでもあります。料理と飲み物で食欲を満たし、それぞれの会話に花を咲かせ、沢山の歌を聞きかつ口ずさみ、最後は滝廉太郎の「花」



を参加者全員で合唱し、お花見会は盛会のうちに終了しました。

なお、参加者はこれまでにないほど多く約70名を数えました。但し、せっかく日本人的な出し物を準備したにもかかわらず、フランス人の参加がなく残念でした。

大和文華館の施設利用に便宜を図ってくださった下村事務局長、ご講演いただいた浅野館長、日本舞踊の青山さん、懇親会を楽しく盛り上げていただいた岡田さんと南木さんには大変お世話になりました。誌面を借りて改めてお礼申し上げます。(事務局)

友好ムード満開のお花見会

会員 大西 弘

久しぶりに奈良日仏協会のイベントに参加し、期待していた以上に有意義で楽しい時間を過ごす事が出来ました。先ず、浅野秀剛館長の海外浮世絵事情は大変興味深く、大いに勉強になりました。明治初期の日本人にとっては然程大きな価値のあるものと言う認識もなかったごく日常的なものが、初めて日本に来た外国人には大変新鮮で好奇心の対象になったという事は大変興味深い事です。好奇心が文化交流の原点である事の一つの証左でもあります。

その後の懇親会は打って変わって大変華やかで友好ムード一杯の楽しいひと時でした。久しぶりにお会いする懐かしい顔ぶれが多く、親しく会話を楽しむ事が出来ました。会員以外の方々も多くおられたようですが、どのような形であれ、フランス文化に興味を持っておられる人達が触れ合う機会を持つ事は大変意義のある事だと思います。今回は特別にソプラノ歌手の岡田由美子さんの素晴らしい歌声がホール一杯に広がり、その親しみやすいお人柄も相まって華やかなムードを一層引き立たせてくれたと思います。たまたま今回はフランス人の方の参加がなかったのと、桜の開花時期が遅れ、文字通りのお花見にならなかったのが少し淋しかったかも知れませんが、それを補って余りある華やかで楽しい催しだったと思います。



大和文華館の枝垂れ桜

会長 坂本 成彦

4月1日のお花見会は、自然界の成り行きで、桜は蕾。1週間後の4月8日は写真のように満開。昨年は1日が満開だったというのに天は非情。

本館玄関前のひときわ目を引く樹高9メートル余の大きな枝垂れ桜は福島県三春町の三春滝桜を親木としている。三春滝桜は日本3大桜の一つといわれており天然記念物に指定されている。大和文華館と三春町の縁は30年近く前、室町時代の画僧雪村の作品を三春町の『三春町歴史民族資料館開館記念』に貸し出し後援したお礼に、種子から育てた苗を寄贈されたもので、30年近くたちこのように立派に成長したものです。



1年前の今頃は、災害直後で「花見自粛」

< さまざまの事おもひ出す桜かな 芭蕉 >

「奈良、我が恋人」(Nara Mon Amour)

会員 ピエール・シルヴェストリ

奈良日仏協会の会報の名は「Mon Nara」「私の奈良」です。2000年代から奈良県に約7年近く住んだ私は、自分に問うてみました。この地域への私の関わりとは、そして「私の奈良」(Mon Nara)とは、一体どんなものかと。

私はつい最近「Nara Mon Amour」「奈良、我が恋人」と題した長さ31秒(『万葉集』の歌の音節数5+7+5+7+7=31にちなんで)の短篇フィルムを作ったのですが、これはポートレート形式の、奈良へのひとつの愛情宣言です。奈良は私にとって、あたかも恋人のような、私の大好きな人みたいです。奈良は私を表層だけでなく奥深いところまで変えました。ここに住むことで、私を誰か別人にしてしまったのです。これはとても微妙で、言葉では説明できない感情ですが。



日本を訪れる外国人の多くは来日以前に、日本語・漫画・テレビゲーム・その他を通じて、日本の文化に魅了されていますが、私の場合はまったくそうではありません。私は奈良県生まれの一人の女性を追いかけてやって来ました。だから私が奈良と出会ったのは、そしてそこからもはや離れられないのは、愛ゆえにです。ここで私をこの上なく楽しい気持ちにしてくれるのは、人です。彼らは私を感動させ、再び戻ってきてここに住みたいという気にさせてくれるし、心が温かく思いやりがあり、新しいものに開放的でありながら伝統も忘れない。要するに、私がこの上なく尊重している美点をたくさん持っているのです。

奈良が「私のここ」であるなら、私の生まれた町ルーアンは「私のよそ」みたいな気がします。そうです、これがまさに、今この文章を書いている瞬間に、私が感じていることです。自分はどこから来たのか忘れないのはとても大切で、それによって私たちは前進できるはずです。つまり、再び問題に立ちかえるのをためらわずに、自分を確立することです。奈良を知る以前の私は、映画に飢えてむさぼるように見ていた映画狂の青年でした。でも今は、(仕事で)ビデオを制作し、生き方の中で自分の欲することを、一人の男です。

奈良はいわば、私の人生における愛であったし、今もそうだし、これからもそうあり続けるでしょう。

奈良県の音楽祭について

理事 仲井 秀昭

6月14日から音楽祭「ムジークフェストなら2012」が開催されます。フランスの音楽家やフランスにゆかりのある音楽家も多く参加します。今年はクロード・ドビュッシーの生誕150周年にもあたるので、音楽祭の期間中、ドビュッシーの作品も奈良女子大学記念館の百年ピアノとかで演奏されるそうです。このような音楽祭が奈良で開かれることは県民としても誇り高く思います。ぜひ皆で応援しましょう！！

関連記事を奈良日仏協会のホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

ラウル・ルイズの映画『見出された時』鑑賞記

会員 工藤 順子



冒頭で滔々と流れる河の流れが画面いっぱいに広がり、その上にやや大きめの活字で配役等が表示されてゆく。決して戻ることのない河の流れは、刻々と失われてゆく「時」を暗示しているかのようだ。初老の紳士は病の床にあり、女秘書に小説の口述筆記をさせているが、「疲れた」と言って机の引き出しから写真を持ってこさせ、ルーペで拡大しながら懐かしげに一枚一枚眺めている。オデット、おばあさん、ヴェルデュラン夫妻、ママ、ロベール・ド・サン＝ルー、パパ、ラシエル、ジルベルト、シャルリュス氏、コンブレの鐘塔、僕、もういちどママ…。

僕、つまり「私」がこの作品の主人公、マルセルである。年を重ね、病弱の身をベッドに横たえるマルセルは、原作の著者マルセル・プルーストと重なり合う。画面にはヴェルデュラン夫妻主催の華やかな夜会のシーンが映し出され、美青年モレルがピアノを弾き、着飾った貴婦人達を喜ばせている。その夜会に現れたマルセルは、中年にしては瑞々しい、青年にしては分別があり、冷静で心根の暖かい紳士のようだ。

時代背景は第一次世界大戦、ドイツ軍の空襲警報で灯火管制の暗い夜道をレストランから家路に急ぐ貴族達。暗い夜道を一人歩いていたマルセルは、お粗末な建物から出てきて立ち去ったサン＝ルーを見る。その「ジュピアンの宿」は、男娼たちがたむろして客からの指名を待つ、いわゆる売春宿である。そこで偶然のぞき窓から見た光景は、シャルリュス男爵が屈強な男に鞭で打たれ…。シャルリュスはジュピアンの宿の常連なのであろう。「男爵がお帰りだ。皆立って並べ」の声に、男娼たちは素直に一列に並ぶ。シャルリュス男爵は、一人ひとりの顔を見ながら、「君は良い男だね」などと言いながら祝儀を渡してゆく。「郷里の親に送金します」という殊勝な男娼もいる。私はちょっと驚いた。彼らは、貴族の男たちよりむしろ健全なのだ。また、マルセルが何のこだわりもなく、彼らの中に混じりこんで、しかも非常に気品があり、素直に存在していることに、内心拍手を送った。

貴族達の間では、華やかな夜会や音楽会が繰り返される。サン＝ルーは志願して戦場に赴く。一時帰還した軍服姿のサン＝ルーはレストランで、赤ぶどう酒を盛んに飲みながら、食欲旺盛である。微笑して眺めているマルセルに、「君も食べよ」と言いながらまくし立てる。「僕は男の知的で高貴な友情を信じている。命がけて兵士たちを守り、彼らに狂信的な愛を吹き込んで死にたい」。その後サン＝ルーは顔に敵の直撃弾を受けて、戦場で華々しい戦死を遂げる。

ある日街でジュピアンに付き添われ、マルセルに引きずり加減の足で近づいて来たシャルリュス男爵は、もう社交界での威力も凋落したのであろう、一族の光は失せている。しかし皮肉っぽく笑っている眼は、相変わらず鋭い。と、貴婦人を乗せて通り過ぎる馬車に、シャルリュスは深々と頭を下げて最敬礼する。「今通ったのは、男爵が大嫌いなサン・トゥーヴェルト夫人ですよ」とジュピアン。「ああすれば人を幸せにできる。たとえ東の間でも」シャルリュスは、ジュピアンに軽く腕を支えられながら、馬車で去ってゆく。

過ぎた日、美青年モレルに求愛したサン＝ルーとシャルリュス男爵。舞台女優に毎日薔薇の花束を贈ったサン＝ルー。ジュピアンの宿に通いつめるシャルリュス。貴族を中心にしたこの作品には、同性愛とマゾヒズムが底流にある。一時帰国したサン＝ルーが「戦場には女がいないのがいい」とひとしきり息巻くシーンと、凋落したシャルリュスがマルセルと街角で出会うシーンが、私はとても好きだ。はじめは、あまり好感がもてなかったサン＝ルーとシャルリュスだったが、DVDで3回鑑賞した今は、愛おしい二人である。

マルセルはいつもの通り、黒い礼服のようなスーツにステッキ、シルクハット姿で石畳の小道を歩いている。すると、石畳に靴を引っ掛けたのであろう、前のめりに身体全体を倒した形で、「時」はしばし静止する。マルセルの幼い日々がセピア色で流れてゆく。叔父上の部屋でのバラ色のドレスの貴婦人（後のオデット）との出会いをはじめ、マドレーヌの味とともに、まるで今その現実を生きているかのようにコンブレでの幼い日々や広い海、砂浜、鐘塔が蘇る。ラストに近い夜会のシーンは、私を不思議な空間に誘った。時を経て馴染みの紳士淑女は皆、老いた。さ迷うように人の群れを縫って歩くマルセル。私は自分が存在する「この世界」はもしかしたら「虚の世界」かも…？ 一瞬錯覚に陥った。流れ去って決して帰ってくることのない「時」。思い出こそ唯一の現実なのかもしれない。

貴族たちの世界を描いたこの作品の映像は、深い藍を基調にしている。調度品にも品位があり、とても美しい。切り取って額に入れたいシーンも多くあった。監督のラウル・ルイズ氏は、2011年夏パリにて肺炎で急逝したと聞いた。繊細で鋭い感性の持ち主である氏の逝去を惜しみ、心からご冥福を祈りたいと思う。

名句の花束 (20)

三野博司 (副会長, 奈良女子大学教授)

Vienne la nuit sonne l'heure / Les jours s'en vont je demeure

夜よ来い 時よ鳴れ / 日々は流れゆき ぼくは残る

(アポリネール「ミラボー橋」1913)

昨年の初夏以来、3・11をめぐっていくつかの名句について語りました。この間、平行してひとつの本の編集作業も進めてきました。4月に刊行される『大学の現場で震災を考える』(三野博司編, かもがわ出版)です。「奈良女子大学文学部くまほろば>叢書」の第1巻を飾るもので、文学部教員による8本の論考がおさめられています。私の「震災とフランス文学」は、一見なんのつながりもないと見えるこの二つの主題について考察してみたものです。「名句の花束」でもとりあげた、カミュ、サン＝テグジュペリ、ヴォルテール、ルソーについて触れています。



今回からは、恋愛にまつわる名句に戻って、シャンソンでも知られているアポリネール Apollinaire の「ミラボー橋 Le Pont Mirabeau」を取り上げましょう。かつてはレオ・フェレ Léo Ferré の歌がよく知られていました。セーヌ川の流れのようなどこかもの憂くゆったりとしたアコーディオンの調べにのって、とどめようのない時と過ぎさった恋の物語が、少しくぐもったような声で歌われていました。いまでは Youtube で、かんたんにいくつかの歌を聴くことができます。ピアノの高音がパセティックに響いて恋の悲哀をかきたてるセルジュ・レジアーニ Serge Reggiani や、速く軽快なテンポと強いビートを伴って歌われるマルク・ラヴォアーヌ Marc Lavoine など、レオ・フェレとはずいぶん違った

おもむきがあり、それぞれにおもしろいです。

ギョーム・アポリネールは筆名で、1880年、亡命ポーランド貴族の娘を母とする私生児としてローマに生まれました。父親についてはよくわかっていません。少年期をモナコ、カンヌ、ニースで過ごし、19歳のときに母に連れられてパリに出てきて、さまざまな職業に就きます。この時期、生活のためいくつかの春本も書いています。

第一次大戦の前年である1913年は、フランス文学史において、数々の傑作が出版された年として知られています。まず最初にあげるべきなのは、プルーストの『スワン家の方へ』ですが、他にアラン・フルニエ『グラン・モーヌ』、ラルポー『A. O. バルナブース全集』があり、そしてアポリネールの画期的な2冊の本、詩集『アルコール』 *Alcools* と絵画評論『立体派の画家たち』 *Les Peintres cubistes* がこの年に刊行されました。前者はいつさいの句読点を排除したアポリネールの代表詩集であり、後者は当時のもっとも革新的な絵画を擁護した書物です。

第1次世界大戦が勃発すると、外国人であるアポリネールは(16年フランスに帰化しています)従軍の義務がなかったにもかかわらず、フランスを愛する気持から志願して、ニームの砲兵隊に入りますが、頭部に戦傷を受けて、2度の切開手術を受けます。アポリネールといえば、頭に包帯を巻いた姿が知られています。大江健三郎の『個人的な体験』では、生まれてきた赤ん坊が頭部手術を受ける場面で、主人公が「アポリネールみたいに頭に包帯を巻いて」と言う一節がありました。これがのちに、『新しい人よ目覚めよ』などの大江文学において、聖なる光を放つ存在イーヨとなるのです。

アポリネールはこの重い傷がいえると、ふたたび活動をはじめて、1903年に書いたシュルレアリスム演劇『ティレジアスの乳房』を舞台にかけます。1917年のことです。これはのちにプーランクによってオペラ化され、1947年、パリのオペラ・コミック座で上演されました。小澤征爾指揮によるCDが出ていて、私の気に入る歌手のひとりでもあるバーバラ・ボニーが歌っています。(以下次号)

Junko のパリ便り (7)

～ あれから一年 ～

高橋 潤子

未曾有の被害を出した東日本大震災から一年がたった。被災者の方々の、家族や友人を失った悲しみや、今なお故郷に帰ることのできない苦しみを思うと胸が痛くなる。地震と津波の被害もこれまでになく大きかったが、今回は原子力発電所の事故による放射能汚染という全く新しい災害まで起こってしまった。少しずつ復興が進んでいるものの、いまだ仕事に就けない人も多く、原発事故はまだ解決の見通しがたっていない。



震災のニュースはフランスでも大きく取り上げられた。二週間近くの間、連日テレビのトップニュースで報じられ、原発の専門家による解説が行われていた。アラブ諸国の革命騒ぎやリビア空爆の開始などがなければ、さらに長い間最重要事件として扱われていただろう。こちらの報道では事故直後から、少なくとも80～100kmは危ないと言われており、日本在住のフランス人に退去命令が下されて特別機が仕立てられた。東京のリセ・フランセは地震による被害も重なって閉鎖され、その間フランスの現地校に編入する子供たちも結構いた。そのような状態だったため、日本政府の発表や報道との間にかかなりの温度差を感じたものである。

それでもフランスの日本に向ける目は同情に満ちたものであった。震災後、アパートの隣人たちや近所のスーパーの店員さん、子供の学校の先生やお医者さんなど、私が日本人だと知る人から家族の安否を尋ねられ、心のこもった言葉をかけてもらった。何年も音信のなかった友人が電話をくれたこともあった。旦那も同僚からずいぶん心配してもらったそうだ。勤務先のインターナショナル・スクールでは全校で3分間の黙とうが行われたが、それは2001年のニューヨークのテロ以来の出来事であった。フランス人の人情にこれほど感じ入ったことはなかったかもしれない。

同時に日本を離れている我々が、日本のために何ができるかとこれほど考えたこともなかっただろう。世界各地で在留邦人による義捐金の募集やチャリティーイベントが行われた。パリでもこの一年の間、数え切れないほどのコンサートや講演、バザー、募金活動が、それこそ草の根レベルで自発的に行われた。何かをしなければという思いに動かされ、手作りの菓子や小物を売ったり、楽器の演奏や歌を披露したり、企業や自治体やお役所に呼びかけたりしたのは、ごく普通の主婦や学生だったり一社員だったりしたのだ。自分も日本にいたら被害を受けていたかもしれない災害を、海外にいるという理由だけで逃れたという一種の申し訳なさや、実際にその場で手伝えることができないもどかしさなどが、日本への深い愛着と結びついた結果なのだろうか。私もいくつものイベントに参加したが、そのたびごとに知った顔に会い、パリの日本人社会の狭さと皆の日本への思いを再認識した。

原発大国フランスでは、福島原発事故への関心は非常に高い。3月に入っていくつものドキュメントが放映された。日本国民に対して情報が隠されていたという内容もあったが、どこの政府も都合の悪いことは隠しているのだろうと思う。なにしろフランス政府はかつて、チェルノブイリの放射性物質を含む雲がベルギーとの国境付近で北に向かったので、フランスは汚染されていないと言ったことがある。違ふと正式に認められたのはずいぶんと後になってからのことだった。全発電量に原発が占める割合が80%もあるフランスでは、原発は必要悪という考え方が一般的なようで、来月から始まる大統領選挙でも、原発反対を大きく掲げているのは緑の党ぐらいであり、社会党は削減はするが廃止はしないという立場なので、左派の中でも意見が対立している。

再び3月11日を迎えるにあたり、ノートルダム寺院では追悼のミサがあげられ、当日の早朝、日本時間の14時46分にはトロカデロで黙とうが行われた。支援や募金のための催しも引き続いて行われている。一年という日々が長かったのか短かったのかわからない。しかし、日本にいる人にとっても、在外邦人にとっても、「あの日」を境に何かが大きく変わってしまったのは確かだと思う。

奈良日仏シネクラブ第27回例会報告・第28回例会案内

2月12日の第27回例会では、ベルギーのダルデンヌ兄弟の作品『ある子供』（2008年）をとりあげましたが、ちょうどその2日前の2月10日、監督自身が新作『少年と自転車』（2011年）のプロモーションで来日し、東京で記者会見をしたばかりでした。ダルデンヌ作品といえば、つねに「子供」をテーマに、困難な状況の中でいかに生きていくかを、真正面から問いかける作品を作り続けています。そんな監督二人の日本の観客への最新メッセージを例会直前に知って、当日は張り合いをもって映画紹介に臨むことができました。話題のダルデンヌ作品ということもあってか、神戸から駆けつけ、映画と映画後の意見交換に大変満足し、私たちのシネクラブの活動自体にエールを送って下さった方がおられ、心暖まる気持ちになりました。と同時に、映画館でフランス映画がかかる本数が減り、レンタルビデオ店でもフランス映画の占める割合が減っている状況がある中、奈良日仏協会という公的な組織が主催するシネクラブに、寄せられる期待と果たすべき役割の重要さを再認し、身の引き締まる思いがしました。

次回の第28回例会では、ダルデンヌ作品をもう少し掘り下げてみるべく、彼らの原点ともいべき作品『イゴールの約束』（1996年）をとりあげる予定です。乞うご期待下さい。尚、新作『少年と自転車』は4月末から神戸・大阪・京都で公開されます。この作品は、ダルデンヌ兄弟が日本滞在中に経験したことがきっかけとなって作られた映画だそうです。最新作を見てから、6月のシネクラブで彼らの初期作品『イゴールの約束』を見くらべるなら、より多くの発見があるように思います。



◇次回シネクラブ例会の案内

日時	6月10日(日) 13:30～17:00
場所	西部公民館4階第2会議室(予定)
プログラム	ダルデンヌ兄弟『イゴールの約束』(1996年)
参加費	会員・学生：無料 非会員：300円
連絡先	浅井直子 Nasai206@aol.com

文化講座「ジャメ先生と『猫』を読む」開講

オリヴィエ・ジャメ先生が、すぐれたフランス語教師として、奈良のみならず日本におけるフランス語教育に多大な貢献をしておられることは、みなさま周知の通りですが、もう一つの顔「夏目漱石の翻訳者・研究者」という側面は、あまり知られていないかもしれません。今秋、ジャメ先生による漱石の6つの講演を集めた仏訳書が、フランスのエルマン社から出版されることになり、これを機に *Je suis un Chat* (吾輩は猫である *Wagahai wa, neko de aru*) を、漱石の原文とジャメ先生による仏訳を対照しながら読む文化講座が開講。その第1回目が4月14日(土)に行なわれ、10人の参加者が藤原町の「苦沙弥先生」ならぬジャメ先生宅に集いました。「吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生れたか頓と見当がつかぬ」と、調子よく始まる漱石の文の、まず日本語で参加者による朗読と解説を聞き、続いてジャメ先生のフランス語による朗読と解説を聞きました。ジャメ先生の翻訳を通じて、日本語で読んだ時とは異なる漱石作品への理解が得られ、文化の翻訳とはどういうことなのか考える機会になりました。質疑は日本語でもフランス語でも大丈夫です。興味のある方は、直接ジャメ先生または浅井(世話人)の方までお問い合わせ下さい。



◇次回日時：5月12日(土) 11:00～13:00	◇場所：奈良フランス語クラブ(藤原町)
◇参加費：2000円(1回)	◇テキスト：プリントを配布
◇連絡先：ジャメ先生 tel.0742-62-6822 E-mail: clubfrancenara@kcn.jp	
浅井直子 tel. 0743-74-0371 E-mail: Nasai206@aol.com	

第105回フランス・アラカルトに参加して

会員 山中 陽子

3月15日(木)15時からいつものように西登美ヶ丘のMardi Mardiでフランスアラカルトが開かれました。今回のゲストはフランス東部、ロレーヌ地方Metz出身のAdeline Decauxというとてもかわいい才知あふれる若い女性でした。彼女はMetz大学で現代フランス文学修士号を取得、専門は民俗学批評でJean Gionoの研究をしています。Jean GionoはL'homme qui plantait des arbres.という作品で日本でも知られていると思います。彼の詩的な語り口と神秘的なところにひかれるとのこと。数年前から日本文化に興味を持ちフランスで日本語の勉強を3年間して異文化交流を求めて日本に来ました。現在京都でフランス語を教えています。フランス語を教えるのはとても楽しいです。フランスではここ5年くらい前から日本への関心が高まり日本文学の翻訳の数も増え日本に関する展覧会や催し物も多く見かけるように思います。特にフランス人にとってマンガやアニメは日本文化との最初の出会であり日本文化を知る一つの方法です。日本はエキゾチックで文化は洗練され神秘的、建築はとても美しいと日本絶賛の彼女です。フランス人はいつもJeが先に出て自己主張が強く議論するのが大好きである。一方日本人は争うよりは調和を求め。このように異なるところが魅力であり、お互いに引き合うのだと思います。今フランスはいろいろな人種も交わり文化的にもフランスだけのものというより国境を越えた影響を受けて変化してきている。全体に他の国の文化を学ぼうという気運がある。同時に移民の問題も抱えている

と話す。最後にL'invitation au voyageやLe pont Mirabeauの詩を仲井氏のギターの伴奏で聞く。あつという間の2時間だった。

◆ 第106回フランス・アラカルトご案内 ◆

日 時：2012年5月17日(木)15時～

会 費：会員1,000円、一般1,500円(お菓子と紅茶つき)

場 所：カフェ「Mardi Mardi」(マルディ・マルディ)

※奈良市登美ヶ丘3丁目12-9登美ヶ丘ビル1F (TEL/FAX:0742-44-5701)

学園前駅からバス(110・128・129・130・138・260番)で7分、

西登美ヶ丘二丁目バス停すぐ(駐車場あり) <http://mardimardi.exblog.jp/11477753/>

講 師：トマ・ルヴェルディ

1974年生まれ、現在ヴィラ九条山に滞在のフランス人作家

世界の中で運命を捜し求める人たちを通じて、喪、悔悛、記憶、忘却というテーマを探求。

2003年に最初の作品を出版、2010年の『世界の裏側』は4作目、ワールド・トレードセンターの廃墟を舞台にした推理小説的筋書き。

問い合わせと申込み：奈良日仏協会 E-mail afjn_info@kcn.jp TEL/FAX 0743-54-0052

◆ フランス生まれの手芸講座ご案内 ◆

『フランス生まれのブリザーブドフラワーで作るミルフィーユのフラワーアレンジ』

アンティークピンク・ショコラブラウン・ブルーベリーパープルの3色からお選びください。

日 時：2012年5月26日(土)13時30分～

場 所：カフェテラス サンフラワー

会 費：4,000円(レッスン料、材料費、ドリンク付き)

装飾用受け皿は別料金

持ち物：ハサミ、作品持ち帰り袋

講 師：古川さやか vert de gris 主宰

申込みと問い合わせ：事務局 中野まで 090-7750-8570

*次回カルトナージュレッスンは、6月30日(土)13時30分～



奈良日仏協会 会員主催の新講座紹介

曜日	時間帯	場所	講師	内容、教科書	問合せ先
金	毎週第3・4 13:00～14:40	奈良ウエルネス倶楽部	仲井秀昭	基本的な挨拶や表現、シャンソンや映画や料理やお菓子のフランス語	0120-194-902
月	5・6月第1・3 7月第1・2 10:30～12:30	なら青丹彩 3階 奈良市 下三条町2-1	各務奈緒子	フランス語の基礎から日常会話まで段階を踏んで学んでいく講座。レッスン途中にティータイムを入れて優雅なひとときをお過ごしください。	奈良佐保短期大学 サテライトキャンパス 0742-93-9674

◆ 会員開催のフランス語講座等の案内を掲載希望の方は、協会までお知らせください。

会員名簿作成のために(ご協力をお願い)

総会の報告でもお知らせしましたとおり、奈良日仏協会ではこのたび会員名簿を作成することになりました。同封の用紙に必要事項を記入し返信用封筒に入れ、**4月30日までに投函**をお願いします。該当する全項目をお書き頂きたいと存じますが、やむを得ず非表示としたい情報については、空欄でも差し支えありません。なお、名簿は冊子の形で会員にのみ配布し、公開はしません。

会員相互の連絡の利便と親睦の増進のために、ご協力の程よろしく申し上げます。

2012年度 第1回理事会報告

日時：2012年3月19日(月) 10時00分～12時00分

場所：菜宴

出席者：坂本会長、三野副会長、ジャメ副会長、濱副会長、浅井理事、井田理事、仲井理事、中野理事、野島理事、樋口理事、森井理事

議事：

1. 2012年総会、懇親会を振り返る
2. 当面の活動計画の実施準備
 - ①お花見会 2012年4月1日(日) 大和文華館にて
 - ②名簿作成 ③20周年記念事業
 - ④モンナラ編集支援
 - ⑤ホームページの維持運営
3. その他

2012年度会費の振込みをお願いします！

年会費未納の会員の皆様には、2012年度会費の振込み用紙を同封させていただきました。今年度もモンナラ発行をはじめとする協会運営の充実を図っていきたく思っておりますので、早めの振込みにご協力お願いいたします。

